

第三〇回大会参加記

谷 口 浩 司

「東北の夜明け」から「東北の文化破壊」とまで論議をよんだ東北新幹線に初乗車、やまびこは「みちのく」をひた走り、仙台駅にすばり込んだ。仙台は初冬を思わせるかのような冷え込みで、改めて東北の

地に立つことを実感させられた。タクシーをとばし、東北大學へと急ぐ。記念講演会の会場となつている大講堂は満員で、中野先生の「村の生活史」と題された講演も、すでに終り辺りにさしかかっていた。近年手がけておられる個人生活史の発掘と、そこをとおして村の論理に迫ろうとする熱のはいった話であった。続いて綿谷赳夫先生の「農政の展開過程と『むら』」では、戦時下の部落責任供出制度から現在の水田利用再編対策事業制度に至るまでの農政―市場原理―と、それとは異質の原理として生きている「むら」についての講演であった。最初の講演になつては竹内利美先生の「むらと制裁」については、遅刻したために聞けなかつたが、レジメによれば、ご自身の村研との係りに始まり、近世・近代をとおして存続した「むら」の自治的性格とその限界、さらにはその解体過程をとおして新しい地域社会生活をいかに展望するか、といった内容になつていて。ともあれ三〇周年記念講演会は、座席が足りないほどの盛会のうちに終り、とつぶりと日の落ちたなかを、翌日から二日間の大会場となつてゐる仙台市郊外の茂庭荘へと移動した。余談になるのだが、宿舎へ向うバスで中野先生と同席し、途中、先生からハイ日系女性の生活史について話を伺うことになり、遅刻分を取り返した思いであった。

さて、今年は第三〇回大会ということで、共通課題「村落の変貌と村落社会研究」—三〇年の歩みをふりかえって—に向けて、安孫子麟「近代村落の本質と展開—明治・戦前期を対象として」、高山隆三「戦後日本農業の経済的枠組」、松本通晴「近畿村落の変動と村落研究の諸系譜」、蓮見音彦「村落と村落論—その推移と課題」、川口諦「山形県

庄内地方の農村の動向」の五つの報告が準備され、自由報告はなされなかつた。

安遜子報告は、宮城県南郷村を事例として、小農經營を基盤とした近代村落を三局面——行政区、部落、六親講——の分化形態として整理を試みたもので、行政機能、村落の秩序、支配構造、生活構造、村落の独自な共同機能についての「ズレ」を明解に提起した。高山報告は、戦後日本農業の生産と農産物消費の構造的特質の表現としての食糧自給率を、極端なまでに低下させたメカニズムの解明が、主に西ドイツとの比較によって試みられた。農産物の自由化の促進と他方での食管制度による米価の政治的決定という相反する枠組みにこそ、戦後日本農業の問題が見出されるべきであり、「むら」が生きているのではなく、生かされていいる論理がこれまで明確に示された。松本報告は、近畿型村落といわれる特性とその解明の試みを研究史の整理として示したものであり、川口報告は「善治日誌」をとおしての農業及び生活の諸形式、そこからされる自己規制と社会規制についてを内容とするものであった。蓮見報告では、農業解体の過程が逆に農村の多様化をもたらし、社会的、文化的な枠からもとらえかえす必要があり、農村はすでに農民だけのものではなく、村落を越えた新しい組織化が展望されなければならないとされた。

総括討論は、司会よりあらかじめ、〔小商品生産、〕村落の地域的差異、〔方法論といつた三つの論点が用意された。旅行三日目の午後となつては、頭の方も定かではないのだが、義務を果すべく懲つたメモを見ると、時間の大半分を〔〕をめぐって費やしている。その主な発言は、〔〕農業の危機とは何か、〔〕農民の主体性とは何か、〔〕社会科学としての農

民層分解論、〔〕小農範疇の問題などであり、充分に討論が深められないまま第二の論点に移行していた。〔〕については、西南日本先進型と東北日本後進型をめぐって、その論拠と妥当性についていくつかの発言が続いたが、時間切れで第三の論点に及ばないまま、これからというところまで終つた。率直に言って、一年間の準備に比して、総括討論は必ずしも充分であったようには思えなかつた。

三〇年は人生の区切りであり、その意味で時代の一区切りにもなる。十年一世代とすれば、村研三世代（村研創設の大先生方はそれ以前の世代になられるだろうが）、五〇年代に農地改革、六〇年代に農民層分解、七〇年代に主体的再編と、日本資本主義の発展と交差する軸を基本軸に課題を立ててきた。八〇年代もこの軸に課題が見出されるだろう。そして関東地区研究会においても議論されているように、「村づくり」「コミュニティ計画」は、より一層農政として推進されることになるのではないかだろうか。その点で、私もまた「システム」は避けられない問題であるよう思う。

近年、日本文化論、日本人論など「日本的なもの」についての議論がかまびすしい。システム論者による『文明としてのイエ社会』などといつた大著もみられる。そうしたことと重ね合せながら、村研もいよいよ文化論、といったいきさか勝手な「期待と不安」を抱きながら、私は会場を後にした。